

大溝城下における町方記録覚書

八 杉 淳

はじめに

近世において為政者たちが農村支配の基礎としたのは村であり、一方の都市支配では、町という単位を基礎として、そこに居住する人々の把握を行った。

町は、その発生を中世後期とし、応仁の乱後に焦土と化した京都の市中において、人々は日常生活を相互に扶助し、寄りあつて維持していくための地域団体を、軒を連ねて庇を交える隣人同士の間で結成したことに求められる。^①このような町が、支配・統制の末端の単位として位置づけられたが、一方ではそうした町を単位として、そこに住む人たちが自らの町内を治めるといった自治の

存在も十分に認められたものであった。

町に関する研究は、江戸・大坂・京都と三都をはじめ、数十万石の城下や堺・博多などの大都市などでは各方面でその成果に見るべきものがあり、町そのものの支配構造や町人の生活などが次第に紹介されてきている。しかしながら、大都市にはおよばない地方の中小都市では当然のこととはいえ、その地方の実情もあり、かつ史料的な制約も働いて、従来は系統だった研究も少なかった。ところが近年、地方史類の編纂に伴って史料が発掘され、市町村史のなかに地方の城下や宿場、港町が紹介されている。^②それらを見ると、当然のことながら町の立地や人々の生活環境、また町のもつ経済的位置などによつ

てさまざまな様相を呈している。そこには地方の小都市に共通した点も潜在する反面で、種々の条件によって特有の地域構造や町方の支配、人々の生活が存在していることは周知のことであろう。

そこで、そうした地方の小都市にみられる地域構造や、町方支配の機構、人々の生活について、共通点とともに特質を探るために少し事例分析を試みてみたい。

今回は、今日に至っても近代都市としての脱皮が十分に成されていないような小規模の町、近江の湖西に位置する城下大溝を取り上げ、その町支配やそこで生活する人々の様相を少し体系づけるため、地域構造の特質とともに町人生活の一端を探る史料を紹介しておきたい。

一、地域構造の特質

大溝は琵琶湖の西岸、北寄りに位置する二万石の城下町であった。今日の行政区域でいえば高島郡高島町、JR湖西線の近江高島駅の眼前が旧城下の地域である。

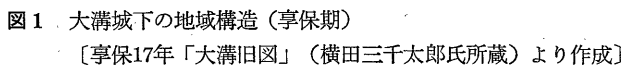
城下成立の起源は、天正六年（一五七八）に織田信澄が養父磯野員昌の跡を継ぎ、信長によって高島一郡が与

えられ、新庄城（新旭町）からこの地大溝に城を移して町造りを行ったことに始まる。そして関ヶ原合戦の後、元和五年（一六一九）に分部光信が伊勢安濃郡から二万石を与えられ、入封したことによって城下は拡張・整備されほぼ今日の町並みの原型を形造るに至った。^④

整備された大溝城下は、小藩の城下でありながらも、侍町、町人町、寺院などの近世城下として共通の構成要素からなる。そしてそれは、根幹に当時の社会背景を色濃く打ち出した封建都市であった。残念ながら初期の城下の様子をうかがう史料は見当たらないが、享保十七年（一七二二）の「大溝旧図」に示された城下全体の概観は図1に示した通りで、^⑤西近江路（北国街道）に沿って南北に細長く立地した街村状の町場であった。侍町部分の記載がないため、この点は別の史料に拠らなければならないが、^⑥町人町については町名をはじめ、居住者や間口間数の屋敷割まで記され、非常に興味深いものである。

少し細かく町人町の構造についてみてみよう。^⑦

町人町は二十カ町から成っており、各町の構成は道路



をはさんで両側から一つの共同体を形成する両側町であった。そして屋敷割は間口が狭く、奥行の長い短冊型で、多くが間口三～五間、奥行十二～十五間程度のものである。なかでも城下の中心的位置を果たしたと考えられる南市本町、新庄本町のように街道に面した町屋では、一戸あたりの屋敷割りも大きく、間口十間、奥行二十間近くといった大規模な屋敷割も見受けられ、富裕町人の居住が知られる。

たとえば南市本町の福井家や新庄本町の中西家などは、織田信澄時代からの有力被官であって、分部氏時代にあっても町の年寄分としてなお勢力を誇っていた。

町人町の人口・戸数は、表1に示したとおりで、これはほぼ一千人前後、二百八十人前後といった数字で推移していた。城下への集住人口は、この町人人口に武家人口を加えたものということになるが、武家人口については近世にその数値を明らかにすることが困難であるので、明治初年の数値によって城下人口と領内人口をみると、領内人口一万二千余人に対して、城下人口一千九百人とで、ほぼ一割五分が城下へ集住しているということ

表1 大溝城下の人口

年代 (西暦)	戸数 (戸)	人口 (人)	男女別人口 (人)	出典
宝暦7年 (1757)	286	1,039	男 513 女 513	『磯野家文書』・『中村穰家文書』
天明8年 (1788)	277	1,026	男 570 女 618	『福井芳郎保管文書』「大溝町明細帳」
天保9年 (1838)		1,188		『磯野家文書』「宗旨改中日記」
明治初年		1,970		矢守一彦『幕藩社会の地域構造』表86より

になる。先ほどの町人人口一千余人という数字に比較して、城下集住人口をほぼその倍に設定するのは若干問題もあるが、これは明治初年の統計史料によるもので依拠せざるを得ない。

この城下への人口集住の比率が一割五分という数字は、城下のどのような特質を物語るものであるか。人口構造について整理しておくことにする。

まず、矢守一彦氏のいう「城下町の人口規模と所領石高との相関

関係」をみれば、二万石の大溝城下の場合、約二万人が領内人口とされ、そのほぼ一割が城下集住人口と設定できる。これらからすると、大溝城下の場合は、石高に比較して幾分から城下集住人口過多といった傾向がうかがえる。その理由として、同氏は「城下町四囲に有力な経済都市をもたなかったため」という点を一般論として指摘している。まさしく大溝城下の場合もその指摘どおりで、周囲に流通経済の要素を持ちうる都市（町場）が存在せず、南は小松、木戸、北は河原市、今津の宿駅が立地する程度であった。しかし、これらの宿駅も同じ近江の湖東にあった主要街道である東海・中山道の宿駅とは比較にならないほどの規模のもので、決して近郷農村の中心的位置を占め、町自体の経済機能も十分であったとはいいい難いのである。^①

つまり人口のみに限ってみれば、大溝城下は分部氏の領国にあって、また高島郡内にあって、都市的要素を持ちうる唯一の町場として立地し、そのため城下への人口集住も当然のことながら高くなったものと考えられる。

一方、城下内の侍町地域と町屋地域の面積比率をうか

がうと、これも矢守一彦氏のいう「概ね侍屋敷七割、町屋三割」の比率に全く合致するものであり、また領主（これは武家屋敷地域面積）と石高の相関について「概ね正の相関を示し」ているということからすれば、二万石の大溝城下であれば約二割程度が武家屋敷面積であることが一般的ということになる。^②

これは、町屋面積十五町四反二畝二十三歩に対して、侍町面積六町七反三畝二歩で七対三という面積比率を示すことからすれば、侍町地域の面積が約一割程度の過多である。こうした傾向のみられる一般的理由としては、政治都市の性格が強い点が指摘されている。

すなわち、町屋地域の面積過多が経済的に領国の中心機能を備えていることとは逆に、そうした点の未発達と政治的都市の性格が強い点を指摘することができるのである。しかしながら、この大溝城下の場合、現在にまでその遺構を残す笠井家などの屋敷割や家臣数から鑑みても、^③決して侍町地域が广大であったというわけではなく、士庶居住地域の面積比率を度外視すれば、むしろ他城下に比較して狭少であったと思われる。

つまりこのように考えると、逆に町屋地域の機能的未発達が、城下の形成・発展に大きく寄与していたと考えられるほうがより妥当であり、そこに経済・文化的な要素が十分に兼備され、いずれも領国において中心的な位置を占めておれば、町もまた異なった景観を呈していたと推測される。

この町屋地域が機能的に未発達であった原因としては、城内下の最も繁華な部分で、領国経済の中枢でもあるシビックセンターの機能が脆弱であったため、十分な活用がなされなかったためである。そのことは、この地が古くからの勝野津として栄え、近世に引き継がれる大溝港を城内下に擁する港町を兼ねた複合都市と成りうる要素を持ち得ていたにもかかわらず、そうした水陸の結節点の性格が低下してしまったということも一つの要因である。

シビックセンターが、城下の経済中枢として機能し、大溝港が水陸（湖上舟運と北国街道、つまり北陸・若狭と大津・京都を結ぶ）結節点として立地しておれば、大溝城下の経済的地位の向上は歴然であり、より大きな城

下形成への方策が開けたのではないかと推測される。単に北国街道沿に、その経済的機能を委ねた街村状の町場が、街道と交差する街路の先端に大溝港が位置し、より広範囲にその機能が点在し、団塊状の町場が形成されるに至ったとも考えられる。

二、城下の町方支配

今まで城下の地域構造について、その特質を紹介してきた。次に、その城下における町人の支配について少し見てみることにする。

大溝城下は、「享保十七年大溝旧図」でみたように二十カ町からなっており、これらの町方を藩では次のような機構で支配していた。^⑦

町奉行（一名）——同心衆（數名）——町年寄（六名）——各町町代（一、二名）

このうち町年寄と町代は、大溝町人の中から選ばれ、実際の町支配を交替で担当していた。

南市本町の町代が、町内の諸事を書き記した公用記録「町内諸要記」の宛名に、¹⁵「御当番」と書いているのが

町年寄である。先に見た「享保十七年大溝旧図」には、

「御会所」の記載があり、この「御会所」の記載が長刀町のみで、他にはその記載はないことから、これは京都のように各町内に置かれ、町の寄り合いなどに用いられた会所を意味するものではなく、ここで町年寄をはじめ、町役人が執務する「役会所」であったと考えられる。そして、藩政機構の末端に位置付けられていたのである。

町年寄については、文化九年（一八一二）十二月の町触で次の様に位置づけられ、各町に通達、徹底されている。

口達之覚

一、町年寄之儀者町方惣差配被 仰付置格別之役柄
ニ 候得者、万年入念我意自由を振廻有之間敷候、
右役柄之儀候得者町方之者共一統鹿略に相心得申
間敷筈ニ候、

一、参会の節等、御用私用無差別、惣而町年寄之者
ハ可為上席事ニ候、

一、人別帳等者、前々より町年寄役ニ而茂有之外、
組下□相替義者無之候得共、町方惣差配被 仰付

置候ニ付而者、趣相替ル筋茂有之候、いづれ座席
礼法等者右之通相心得鹿略之致取扱間敷事ニ候、

文化壬申年十二月

大溝

町奉行所

つまり、町年寄は「町方惣差配」するものであると規定し、また町内の寄合なども「可為上席事」とわざわざことわっている。このように、町年寄は城下町方での要職とされ、先述した南市本町の福井家、新庄本町の中西家など有力町人がその任に当った。

町年寄のもと、各町ごとに町代が一、二名置かれ、町内における事務全般をとりしきっていた。

たとえば、町内のものが他村から養子を貰う場合の「覚書」には、親主とともに町代が署名しているし、また町内における諸般の出来事すべてが町代へ報告されている。^④ こうしたことから、町代は対外的にも、また町内においても、すべてにおいてその町を代表する存在であった。この町代の選出の方法については、史料がないためうかがえないのが残念であるが、その任命は藩から行われていたようである。ここ南市本町の場合、「町内諸

要記」の各簿冊の最初の部分に町代の推移が記されている。

その推移をみると、数年から十数年の期間で、任期は定まっていなかった。そして、文化三年（一八〇六）

三月には「私義町代被為仰付、相勤居候処、乍恐親共老年ニ相成家業之手回り品困居申候」と願ひ出ているように、当人の都合によつて退役する場合も多かったようである。

文政九年（一八二六）には町代に対して次の様な申渡が出されている。^②

此度町会所初而出来ニ付、町中惣町代出役可致旨使受、則拾月朔日夜之申渡し定、

一、毎月朔日、六日、十一日、十六日、廿一日、廿

六日、

右日限朝五時より四ツ時迄出役致置候、

一、諸願書外御伺申上候事、

右日限可被罷出事、

尤急御用向並御届申上候事、何時ニても当番宅江可

被申出候、

一、願書御沙汰其外難儀よらす申達候事町会所ニ而

申付候、

すなわち、この時に初めて町会所が出来、毎月一と六の日に町年寄がそこへ出役するので、その日時に諸願や御伺は申し出ること。もっとも、至急の場合については何時でも当番宅へ申し出る、といったことが申し渡されている。ここには「此度町会所初而出来ニ付」とあり、先に「享保十七年大溝旧図」に御会所の記載があることを述べたが、その御会所がこの時改築成ったものか、それとも新たに別のものが新築されたものかについては傍証する史料がないため明らかでない。

町奉行のもと町年寄——町代の町方支配のシステムは、町人生活の中ですべてにわたって生きており、その上からの統制で代表的なものが藩からの町触の下達である。「町奉行所以口達嚴敷被仰付節向後心得違無之様、月並之町汁之節読聞」と、嘉永三年（一八五〇）の儉約令の末尾に記されているように、町年寄、町代を経て寄合で町人すべてに周知、徹底が図られたのである。

このように町方では、支配の端に末位置づけられたという反面、町年寄以下、町人自らの手によって町の運営

がなされていた。

三、町方記録にみる町人生活

次に、南市本町の「町方諸要記」に記された町人生活の諸相を少し紹介しておこう。

まず、城下の町人の生業であるが、寛政元年（一七八九）の「町方心得申渡覚」によれば、

当町渡世之事

南部津軽江商参候者少々御座候、其外京大津大坂より諸色買來、村方江売申候、又朽木より炭木出候を買方々江商申候、

とあって、京坂や大津から物資を仕入れ、村方へ販売したり、南部・津軽などの東北地方へ商売に出向いたりするもの、また朽木の薪炭を運んで売りさばくものなどがあることが記されている。

さらに具体的に見たのが表2である。城下全体ではなく、南市本町に限ったものであるが、町奉行からの各町職商調査の回答によったもので、安永二年（一七七三）二月と天明四年（一七八四）十一月の生業を示した。享

保十七年の「大溝旧図」では二十一戸の屋敷が記されているが、この職業書上では十七戸と十六戸の戸数と若干のくい違いが生じている。これは時期的な理由によるものか、それとも他の理由によったものかは明らかではない。

表2からうかがえることは、ここ大溝城下の特色でもある津軽・南部などの北国物産の間屋をはじめ、酒・醤油・油・米などの日常雑貨、朽木問屋、農村相手の肥料商などが見られる。またいずれも商売に兼業が多く、これが人々の利便性を求めたものか、それとも一業種のみでは生活が成っていかなかったものかは定かではない。しかし、人口規模が大きい大都市の有力商人とは異なり、その需要からすれば、おそらく後者の理由によるところが大きいと推測される。

今度は屋敷地の売買貸借についての記録を少し追ってみよう。

表3は、明和から安永年間の約十五年間になされた南市本町における屋敷地の売買貸借である。ない年もあるが、平均するとほぼ一年に一件の割で見られることにな

表2 南市本町の生業

安永2年2月(1773)			天明4年11月(1784)		
源 六	日 雇		源 藏	南部かせぎ	
源 太 郎	南部かせぎ		慈 □	手習謡師匠	
介 次 郎	隠 居		清 助	酒屋・百姓	
清 次 郎	酒屋・百姓		仁 兵 衛	下作百姓・日雇	
六 兵 衛	糶屋・請作百姓		伴 兵 衛	津軽かせぎ	
□ 右 衛 門	津軽かせぎ		三右衛門母	賃 仕 事	
半左衛門	糶屋・朽木問屋		半左衛門	硯 商 売	
清 太 夫	百姓・日雇		九 兵 衛	郷宿・米屋・瀬戸物屋・肥し物屋	
蔵 之 進	御屋敷奉公・大工		庄 兵 衛	荒 物 屋	
佐次右衛門	医 者		三 四 郎	醬油屋・質屋・古手屋・米屋	
儀 平	醬油屋・見世商			百姓・肥し物屋	
又 兵 衛	百姓・日雇		儀 兵 衛	百姓・小売商	
七 兵 衛	南部かせぎ		又 兵 衛	南部かせぎ	
久 作	見世商・郷宿		七 兵 衛	郷宿・荒物屋	
茂 兵 衛	見世商・日雇		権九郎後家	糶 商 売	
吉 兵 衛	茶屋・郷宿		茂 兵 衛	郷宿・菜種油商・干物屋	
	菓子屋・郷宿		吉 兵 衛	郷宿・菓子屋	
17戸(28種)			16戸(31種)		

* 「町内諸要記」(『福井芳郎家保管文書』)により作成。

表3 明和～安永年間の居屋敷売買の状況(南市本町)

年 代	売(貸) 主	買(側) 主	売買・貸借の別 そ の 他
明和6. 5	新庄本町 市 右 衛 門	蠟燭町 仁 右 衛 門	譲り渡し
6. 9	蠟燭町 仁 右 衛 門	井 上 官 蔵	貸借
6.12	南市本町 五兵衛借家宗八		商売勝手につき引っ越し
7. 5	今市本町 吉 右 衛 門	南市本町 清 太 夫	借家売り払い(売り申し)
7.12	南市本町 清 太 夫	西 町 半 七	売り渡し
8. 5	南市本町 五 兵 衛	井 上 官 蔵	貸し申し
8.10	蠟燭町 仁 右 衛 門	東江州 箕作蔵之進	貸し申し
安永4. 正	南市本町 蔵 之 進		当地不勝手に付き引っ越し
5. 正	十四軒町 勘 六	南市本町 源 太 郎	永代買受け
5. 7	蠟燭町 仁 右 衛 門	北舟入町 伝 兵 衛	売り払い
6. 4	蠟燭町 仁 右 衛 門	蠟燭町 佐右衛門方庄兵衛	貸家に仕り度く

* 屋敷の所在地はすべて南市本町のものである。

* 売買・貸借の欄は、史料にある文言によって引用した。

* 「町内諸要記」(『福井芳郎家保管文書』)により作成。

る。わずか二十戸たらず、そして城下の中樞に位置する町で、これだけ頻繁に退転が見られるということは、何を物語っているのだろうか。表にあげた前々年の明和四年（一七六七）の新庄本町市右衛門と、蠟燭町仁右衛門との屋敷売券には、表間口四間半、奥行七間半で、「御年貢米（地子）」が一斗七升三合とあり、これを換算すると一石五斗の石盛りとなる。一石五斗という石盛りは、村方でいえば上田の斗代に相当し、決してその率が高いものではないと考えられる。ここ南市本町の売買貸借願書にある事由には、「難渋付」といったものがわずかに見られるものの、大半が「商売勝手ニ付引越」などと、逼迫した状況のものではない。こうした点については、今少し分析が必要であるため、後考を待ちたい。

先に、町代が町人すべてに触を読み聞かせる場として、「町汁」を上げたが、その町汁というのは、町内全員が集まって、さまざまな事項を協議する寄り合いで、「月並」とあることから月例で行われていた。また、南市本町の場合は、もともと家持ちが年交代で当番になり、これを「やど」と称した。そして、自費で酒肴を振

る舞っていたようである。しかし、寛政十二年（一八〇〇）以降については、家別に六十匁から二十八匁と当番の振舞料を定め、正月十六日の初町汁の際に決められた銀高を出すこととなり、その後はこの出金の規定に変動が見られる程度であった。^⑨

こうした負担金以外には、町内での祝儀・不祝儀を町内総出で行うことから、その礼金が町財政に組み入れられた。その取り決めは次の様なものであった。^⑩

定 目

一、家買祝儀銀一枚、尤五分疋定也、振舞料銀壹枚、

一、婚礼養子家買是迄町中より酒五本ニ一把祝儀ニ遣候得共、向後町内より之祝儀相心得候筈ニ相定申候也、

明和八年卯正月十六日ニ相極ル也、

一、婚礼之節亭主分振舞料銀五両内儀分銀五両、尤振舞料也、都合銀壹枚町内江差出シ申管ニ定ル、時ニ安永弍巳年正月十六日町汁之上相極メ申候、尤町内より祝儀として酒肴料ニ銀貳両出し申極也、

親子兄弟ニ而茂祝儀出し候義仕間敷事、再縁之儀者半減可為事、

一、養子振舞料銀五両、再縁半減也、

(下略)

まず「家買」である。これは、家持ちが町の構成員として正式に認められるということであるから、当然のことながら町入りの挨拶的なものであった。次いで婚礼であるが、亭主分、内儀分の振舞料が定められ、これも町内でその一員として認められる必要があったのである。

最後に、「町方諸要記」の中に最も多く留められている、触書、町触について見ておきたい。

「町方諸要記」の中に記された町触のなかで、大溝藩の民政の基本方針ともいえる条目が見られる。若干長文であるが紹介しておこう。

申渡覚

一、町中之者家業を大切ニ相勤可申相定候、口錢を以渡世致候旨ニ候間高利を貪申間敷候、衆人之為ニ相成候様ニ実□を以商売を致し候得者自然と繁栄ニ相成候、

一、銘々親孝行第一ニ励可申候、女ハ別而舅姑に孝行をいたし可申候、子共ハ男女共親々より急度申付不孝□埒ニ無之様ニ相嗜を可申候、

一、博奕等固停止申付候、万一有之候てハ急度咎申付、其宿者過錢三貫文兩隣向隣者式貫文ツ、申付候、然らハ相互ニ致吟味急度□可申候、

一、於当町毎月朔日、十一日、二十一日、右三日市立被仰付頭取之者共直段之儀、正直ニ相立衆人合いたし候様可仕候、若も不正直之義有之候ハ、急度咎可申付候、

一、是迄者郷宿野者共、村々より何ニよらず貨物致持参候ハ、請取売主差急ぎ候ハ、内仕切遣シ□三日市立之上本仕切遣可申候、尤定之口錢引可仕候、市立相済之上帳面町奉行江差出可申候、

一、婚礼、元服等餘約を立、無益之費を省き可申候、並石打等度々申付候、近所之者制道致可申候、若シ有之候ハ、近所之者咎可申付候、

一、京・大津江奉公ニ出居候者とも、京・大津御屋敷江書付を以御届ケ可申候、本人名前親々名前並

居所之名前書付を以差出可申候、年頭・盆中御屋敷江御礼ニ罷出可申候、尤持参ものハ仕間敷候、右之通以書被 仰出候、

天明四辰年

御当番

十月

饗庭八左衛門

といったもので、八代藩主分部光実の時に下された定書である。

(1) 町中の者は家業に励み、高利の口銭を以って渡世してはいけない。(2) 親孝行の奨励。(3) 博奕等の禁止。(4) ここ大溝では毎月朔日、十一日、二十一日の三日間、市が立てられたが、その市の取引にあたっては不正のないように。(5) その市では、村々から諸物産を持ち帰り、郷宿が仲介して取引したが、売り主が換金を急ぐ場合は、郷宿が内仕切(内金)を支払、市立の後に口銭を引いて精算する慣習であったが、この算用に不正のないようにするため、精算の帳面を町奉行に提出し、監査を受ける。

(6) 婚礼・元服に關しての儉約で、「石打等」の禁止。(7) 京・大津へ奉公へ出るものは、京・大津の分部屋敷へ名前を届出、年頭・盆中の御礼に出向く、などといった内

容のものであった。これらを見ると、いずれも町内の綱紀肅正とともに、奉公などによる領民の流出の把握といったことが基本理念として読み取ることができる。

またこれ以外の町触のなかで、とりわけ目につくのが町方の儉約にかかる規定である。主だったものだけを拾い上げてみると、文政十三年(文化十三年、文政三年の再達)、天保三年、天保十三年、嘉永三年(文政十三年の再達)、嘉永四年、慶応二年に町方へ儉約触が出されている。

その内容は、いずれのものもほぼ似通ったもので、町人生活の細部にわたるまで制約を加えている。たとえば、慶応二年(一八六六)のものをあげると、

口 達

一、明十一日より御停止御免而相成候間、此段一々家別不残様相触可被申候、以上

儉約書

一、御日待之節、御神酒・御洗米ニ限り可申事、但し、若もの男女子供他町付合無用之事、一、神事之節、客来ハ勿論重之内取扱無用之事、

一、町汁地子取之節、酒肴取扱決而無用、並ニ茶菓

子たり共致間敷事、

一、五節句之節、客来重之内取扱無用之事、

一、婚礼振舞之節、一汁一菜、酒肴一品ニ限事、

但し、重之内取扱無用、

一、出産の節、祝ひ取遣無用、

一、仏事之節、一汁一菜限ル事、

但し、酒取扱無用、並報恩講・百万遍之節、茶

はかりと限り、茶菓子たり共無用之事、

一、葬式之節、町内拵悔受等ニ男女共打寄候儀、以

来相止メ候事、

一、家作等之節、互手伝無用、

但し、祝ひ取扱致間敷事、

一、衣類木服ニ限ル事、

但し、養子嫁取之節、他所付合無扱せつハ、手

織紬迄ニ限り可申事、

一、はき物等、皮はなを決而無用之事、

右之趣被 仰出候間、嚴重ニ相守五ヶ年之間諸事花

美成事不相成、固相慎可申事、

慶応二丙寅年

十月

町役

というように、各種行事の客呼びの禁止をはじめ、近隣の付き合いや衣類の制約など日常生活の事細かな点にいたるまで規制されている。他の年次に出された儉約個条もほぼ同様のもので、寛政四年（一七九二）には大溝祭の曳山巡行が禁止、文政三年（一八二〇）には冠婚葬祭の節に、京・大津から「超過な料理」を出すことの禁止などの条目がうかがえる。

このように見ると、大溝城下の町人の生活は、ある一面では儉約仕法によって事細かな制約が加えられていたことがうかがえるが、その反面で、こうした儉約の仕法が各町に下されることからすれば、日常がある程度余裕のあるものであったということも事実である。

ま と め

以上、大溝城下の地域構造の特質とともにそこに住む町人の記録を紹介しながら、生活の一端を紹介してきた。南市本町に残る「町方諸要記」は、町方支配の末端

機構を担った町代が、日々事あるごとに町内の出来事を書き記したもので、さまざまな事柄が綴られている。その中にある程度定期的に見られるものを上げると、正月十六日の町汁、同月の日待、四月一日の山王神事（大溝祭）、九月二日の火道具改^⑧、十一月の地子取があり、その他不定期的なものではあるが、やはり日常的なもので、冠婚葬祭などがあつた。他城下の状況をうかがつてはいないため、比較検討することはできないが、他の城下の町人町にあつても、ほぼ同様の行事が行われ、町内が運営されたであろう。

最後に今回史料紹介した大溝城下の一町内に限つて、その町方支配と生活の諸相を整理しておこう。

大溝城下では町奉行のもと、町年寄、町代といったシステムで支配され、城下の町屋シビックセンターにあたる南市本町では、その町代によつて記された「町内諸要記」が残されている。それによれば、決して裕富とは言えないまでも逼迫したといった状況でもない。一般に農村での饑乏と、都市での富裕町人の台頭といったイメージがえがかれている中で、ごく平凡な日常生活が送られ

ていたのではなからうか。ただ、「超過な料理」を京・大津から取り寄せることや、奉公先が京都・大坂などと言つた点をひとつ取り上げても、地域構造の特質が物語るように、大溝城下における経済構造が、京都・大津に依存するところが大きいということである。またその一方で、通婚圏などからすれば^⑨、高島郡内の農村が多く、郡内のある程度の中心性は保つていたということも言えない。つまりとところ、ここ大溝の城下は、大・中規模の都市部を形成する城下と同様に、その中心性というものに非常に周辺農村からは強い期待があるにもかかわらず、一方でそれに応えられるだけの町場形成が、景観的にも、また機能的にもなされていなかった点が指摘できる様に思われる。

史料分析が不十分で、単に「町内諸要記」の内容紹介にとどまつてしまつた感がある。しかし、小規模の町場で、まとまつた町方記録紹介といった点では、わずかにあるがその一端を果たせたように思う。今後にも不十分なところを補填しつつ、さらにこの城下の町人生活の諸相について探つてみたいと思つている。

註

① 「週刊朝日百科日本の歴史」79、法度と淀。

② 三都をはじめ大都市の近世の「町」に関する研究は、いちいち挙げれば暇がないが、京都の場合をこく一部紹介すると、たとえば京都市編『京都の歴史』第五巻く第八巻、CDI編『京都庶民生活史』（京都信用金庫、昭和四十八年）、秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』（法政大学出版局、昭和五十年）、守屋毅『京の町人』（教育社歴史新書、昭和五十五年）などがある。

③ この市町村史の成果についても、滋賀県では、『新修大津市史』（大津市）での膳所城下、『草津市史』での草津宿などが紹介されている。

④ 大溝城下の歴史的な変遷や、城下形成の過程など、詳細は『高島町史』（高島町、昭和五十八年）をはじめ、拙稿「大溝城の変遷」（高島町文化財資料集四、昭和五十九年）同「大溝城下の地域構造とその特質」（『盆地の歴史地理』歴史地理学紀要三一、平成元年）に紹介してある。

⑤ 横田三千太郎家文書。

⑥ 横田三千太郎家文書「城下町絵図」「家中屋敷絵図」。

⑦ 町人町の地域構造については、前掲の拙稿「大溝城下の地域構造とその特質」において、すでに分析を試みている。

⑧ 中西家文書「中西家系譜」によれば、同家は藤左衛門の代に若狭国美方郡から新庄村（現在の新旭町）に移り、高

島七頭の祖高島氏の与力として活躍。その後信澄に招かれて所領と屋敷を宛行われて大溝城に下居を構えた。福井氏にあっても同様の系譜である。

⑨ 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』（大明堂、昭和四十五年）、『都市プランの研究』（大明堂、昭和四十五年）。

⑩ 前掲⑨。

⑪ 東海道の草津・石部・水口などの宿場の場合、通行量の関係もあろうが、その状況は相当なもので、当然のことながら周辺在郷の中心的位置を占めていた。

⑫ 前掲⑨。

⑬ この数値は、横田三千太郎家の「享保十七年大溝旧図」および武家屋敷地域を示す絵図などをもとに現地比定を行い、二五〇〇分の一都市計画図上で、面積測定機によって測定して数値を求めた。

⑭ 前掲⑨。

⑮ 笠井家は、分部氏の所領が伊勢にあった時以来の譜代の家臣。今日にその景観を残す数少ない武家屋敷の遺構。

⑯ 勝野津といわれた港も、中世には今津や舟木などに一時期隆盛を奪われるが、ふたたびその地位を奪回する兆しが見え始めるのが、大溝城の築城によってであった。しかし、分部氏の支配のもとでは十分な発展も見られず、北に隣接する灰太浦とともに朽木などからの薪炭の積出港としての性格が強いものとなる。

⑰ 福井芳郎家文書「町内諸要記」。

⑮ 「町内諸要記」は、大溝城下の南市本町の町方公用記録で、宝暦十年（一七六〇）から大正期まで二十二冊に、町内への町触をはじめ、訴状の控え、町汁の勘定など日常生活の公的記録が留められている。なお、各々の簿冊の表題は、「町方日用控」、「万覚帳」などとなっている。

⑯ 前掲⑤。

⑰ 前掲⑬。

⑱ 前掲⑬。

⑲ 前掲⑬。

⑳ 前掲⑬。

㉑ 福井芳郎家文書。

㉒ 高島商人の代表といわれるのが、南部（岩手県）地方に進出した村井・小野の両家である。なお、この小野組に関する研究には、宮本又次『小野組の研究』（昭和四十五年）があり、その後、『高島町史』の中でも若干触れられている。

㉓ 前掲⑬。

㉔ 前掲⑬。

㉕ 前掲⑬。

㉖ たとえば、打下区有文書の検地帳などによれば、上田の斗代が一石五斗と記されている。

㉗ この寛政十二年の振舞料も、文政十二年（一八二九）には、一律錢二貫五百文と引き下げられている。

㉘ 前掲⑬。

㉙ 石打というのは、同月付で別途通達された、婚礼等の際しての「礫打」であると推察されるが、その具体的内容については明らかではない。

㉚ この火道具改めについては、継年的に見られるものではないが、藩から与えられた火消道具を維持管理するためのものであった。ここ南市本町の場合、隣接の蠟燭町とともに用具を管理し、人足を出すきまりであったようで、たとえば文化九年（一八一二）の場合、南市本町は水籠二人、団扇一人、提灯一人、梯子一人、留守居一人、そして蠟燭町が、水籠一人、団扇一人、留守居一人と記されている。これらの用具の管理は八軒で行われていた。

㉛ この点は、今回詳細には分析を試みていないが、「町内諸要記」にみる「帳外」・「帳加」などの事例を少しうかがうと、高島郡内の新庄村や舟木村、朽木村などからの転入、奉公では京都がもっとも多い。

